

これみ
週刊「考歴民」 No16

2021.7.12 交野古文化同好会

考古・歴史・民俗の頭文字を取って考歴民（これみ）と名付けました。

葛城北峯の宿（交野エリアを通読）

北峯宿

青谷寺 中山寺 信貴山 往生院 下津村
髪切 生馬 鬼取寺 田原 石船 師子石屋
金剛寺 甲尾 高峯 波多寺 田寺 八幡の
十七霊所である。

第十の宿は石船

磐船明神と書く。

田原の里の水を集めた天の川は生駒山地の狭隘をぬける。磐船峡である。その谷のもっとも奥深く神聖なる所に、巨岩川を覆い、重畳する岩根の間を水くぐる仙境がある。磐船明神はここに鎮座ます。

饒速日尊が天磐船に乗って天下った河内国河上嵯峯はこのすぐ近くにあるという。

最近発見された交野の森古墳群は肩野物部の実在をうき上がらせた。

その祖饒速日尊降臨の岩船を祭祠する磐船明神は、はるかなる太古より聖なる浄域であった。その後、住吉の神代記に見る饒速日山の領域として住吉の神領に一時加えられていたこともあったのであろうか、住吉の四神を祭祠する社と化した。天の川は上流から下流に至るまで、おしなべて住吉の神で占められ、船形の大岩は水運を守る祭神にすりかえられた。

河辺の巨石には地藏・阿弥陀・十一面・勢至（弥勒？）の四仏が刻してあり、往昔には岩にとりつく仏龕が設けられ棧橋で四仏のすぐそばまで参詣できるようにしつらえてあった。

石仏は十四世紀の作品で住吉の本地仏と伝えられているが、容易に定め難いとり合わせである。

また、社前入口にはこれまた巨石に彫りつけられた不動明王があって「交野郡住吉大明神 開白大蔵坊」「天文十四年乙巳十二月吉日法印清忍」とある。不動明王の尊前は手頃な広場となり、柴灯護摩供を修するにうってつけの斎所である。神仏分離以前にはここもまた験者の霊所であり、水無月の大抜には近在参集したという禊所でもあった。

第十一は師子石屋

今は獅子窟寺という。

交野の里を一望できる尾根上にこれまた巨岩重畳する霊所がある。

突き出た岩根は牙をむく獅子吼の状を形どり、まさしくそこは師子の石屋。

当時の縁起にいう。役行者金剛山に居するのとき、この山頭に五雲たなびき並びなき霊所と望まれ、錫を飛ばしてここに至り、窟中に宴坐す。

たちまち浄瑠璃世界のひろがりを見、薬師如来の浄土とすという。

その後僧正行基ここを梵刹としたと伝える。

ところでこの寺の山号を普見山と称し岩窟を金剛般若窟と称している。

宝積経には文殊菩薩の霊場と称した方が理にかなうようでもあり、行基菩薩開創の伝承もどうやらその辺から出てきた説話のようにみうけられる。さらに同寺の縁起はいう。天長年中弘法大師この山に至って仏眼明妃の法を修すと。時に七曜降下し、天の川の左右に散在すと。文殊師利は諸仏の母なるが故に仏眼仏母に通じ、仏眼尊、八字文殊ともに七曜九曜二十八宿を司る。交野に伝わる星の森の伝承は獅子窟寺をとりまいてさらに広く輪をひろげてゆく。

獅子窟の周辺奇岩多く、験者の霊所にふさわしい雰囲気を持ち、点点する巨石怪石は次の霊所へと人々を導いてゆく。

第十二は金剛寺

獅子窟を去って北へ進むこと数丁傍示という在所の西に嬰兒山またの名を龍王山という山頂に達する。

山頂に龍王の祠があり旱魃の折には村人達は慈雨をここに祈ったという。龍王山の東麓に今でも台地状の地形が残りここを小字金剛寺と称している龍王山を含んだ祈雨の霊所、ここには行者の籠り所と考えられる石を組んだ石窟も存しており、北方の宿にいう金剛寺と考えて誤りなさそうである。淳和天皇の天長二年（825）干ばつでイネが枯れた。

この苦しみが天上に達し、弘法大師に雨を祈らせたのが山頂の龍王石である。

あまりにも早く廃絶したためか、地名にかろうじてその名をとどめるばかりで創建にまつわる伝承やどのような歴史をたどったのかもはや誰も語る人はいない。

第十三の宿は甲尾

「鑑」「図絵」には鴻尾山とあり交野尾とも書す。今日の交野山岩倉開元寺址を指すと考えて誤りない。その麓は禁野に続く交野が原の扇状地で古代にはすぐ足下に郡衛と郡寺長宝寺を眺めることができた景勝の地で、山頂にはひととき大きな巨岩と呼んでいるが、交野が原のどこからでもよく望まれ、この地方の神南備であったと思われる霊所である。

その麓には正面に交野山を拝すような形で機物神社は鎮座し古くから交野の人々に親しまれた聖なる山であった。

この山頂に開元寺という寺が作られたのは発掘調査の結果鎌倉時代といわれ、その前身寺院が山麓の神宮寺にあったとされている。

「興福寺官務牒疎」には「開元寺 徳泉寺 津田寺 在同郡（交野）俱宣教大師開基坊舎八舎宛有之」としており、奈良時代興福寺の僧宣教の開基と伝えている。

平安時代からこの交野の神南備は修験者の行う所となり、岩倉開元寺が建立されてこの峻険に伽藍など一時期があった。

二度にわたる祝融の災にあい、伽藍をすべて失ったが、寛文の頃天台宗京猪熊荒神別当實傳という僧がここに観音の梵字を刻し、その近傍にある巨石にも三宝荒神の種子「ウン」と金剛界大日の種子「ハン」を刻し、中心の巨岩に一穴を刻して法華経六十六部を納め、ふもとの寺院に仏像を安置して整備するなど中興につとめた。

今日まがりなりにも開元寺の余命が宜春院にうつがれているのは實傳の努力のたまものといえようか。

法華経六十六部の中にある石灯籠と滝不動梵字写真を貼り付けた。

第十四は高峯。

第十五は波多寺。

第十六は田寺。

第十七は八幡。

こうして一時期歴史の光と陰の部分をもった葛城北峯の宿ではあったが、それは本来麓に住まう人々の神や神仙との交流の場であった。

霊山あり、霊木あり、巨石あり、かつは西方浄土をまで含んだ神仏との交渉の世界であった。

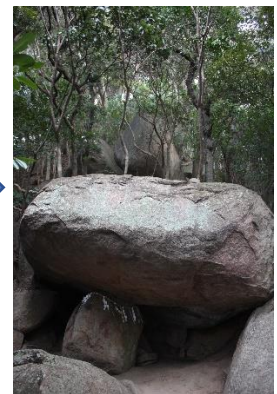
ここまで「葛城北峯の宿考」の原文とおり

葛城北峯の宿考 木下蜜運 著

ここから挿入



岩船神社御神体



獅子窟岩



竜王雨乞岩



観音岩

六根とは眼・耳・鼻・舌・身・意の六つの感覚器官のことで。

この六根にともなって、さまざまな罪障が生じます。目で美しい女人を見れば色欲がおこってくるようなものです。

そこでこの六根の罪障をとり除き、心を清らかにするのが六根清浄です。

眼根清浄、耳鼻舌身意根清浄なり、この六根清浄なり、この六根清浄を得己らば、更に寿命を増さん。

斗藪の客 遂に爾く帰ることを忘れ

逸遊の士 なんぞ懐を潤やかにせざらん

(訳)

山中に修行する私は、遂にはこのように都に帰るのを忘れる。山に遊ぶ人士は、必ず懐をゆったりと広げてくつろぐ

修験道では山中を歩いて修行することを斗藪と呼んでいます。

仏教でいえば頭陀行にあたりましょう。この斗藪は何のためにするのか、というと、身心を修練して雑念をはらい、心を純粹にするためにおこなわれるものです。

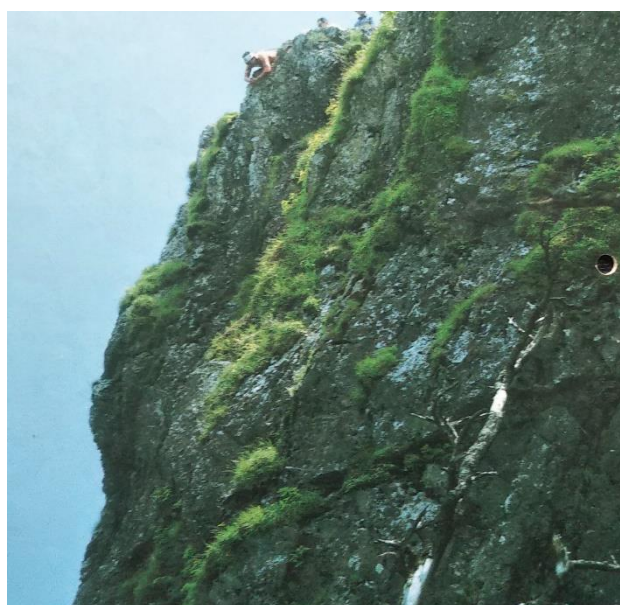
山の冷気に打たれて、一切の世俗の雑念を捨てるのが斗藪の行いなのです。

*頭陀行とは…頭陀というのは、衣食住に対する欲望を払い去って仏道を求めることや、そのための修行のことを指す言葉で、托鉢して歩くことや、托鉢僧そのものを指す言葉でもあります。

歩きながら唱える言葉に「六根清浄」という呪文があります。

この六根清浄がドッコイショとなり、さらにドッコイとなったというような俗説もあります。

日本民俗の清浄心を表す言葉の一つにこの六根清浄があります。



大峰山・西の覗(昭和57年撮影)

有難や西の覗きに懺悔して弥陀の浄土に入るぞうれしき

当時、私市地区で大峰講が復活、毎年7月頃十四、五名で登っておりました(今は消滅)

次号 7/19号